

ネットワーク・心・ユニセフでのつながりを感じながら 「私たちにできることは」をテーマに



7支部合同セミナーを開催

2009年7月4日(土)/高松市アルファあなぶきホール

実際に出かけて行き、行って学べるプログラムを幅広い参加者でやってみました。

さめき遍路道 途中下車

香川県支部 橋田行子

梅雨空の中、午後1時の開催時間。大阪・兵庫・岡山・広島・愛媛・香川県から82人の各支部ボランティアが集まりました。奈良県支部が急なイベントのために参加が不可能となり、6支部での開催となりましたが、「私たちにできることは？」をテーマに、それぞれのボランティア活動の共有をはかりました。

まず、日本ユニセフ協会・菊川穂氏のアフリカのレソトやエリトリアでの現場支援活動の現状などを報告していただきました。次に、兵庫県支部・中村弘子さんによるユニセフ県民ショーでの楽しい交流。大阪支部・学習チームの安達洋さん達による学習事例報告。特にペープサートによる幼児対象の学習事例はとても新鮮で、多くのボランティアの参考となりました。



7月4日は、高松空襲から64年目の日でもあり、改めて私達の今の平和に感謝し、世界の厳しい状況に置かれている子どもたちに向けて、テーマ「私たちにできることは？」は、支部ボランティアとしてユニセフの啓発を、より多くの人々に伝えることだと共有確認しました。

菊川穂(日本ユニセフ協会)さんによる

「開発途上現場におけるユニセフ活動」報告

南アフリカで2年、レソトで3年、エリトリアで4年。計9年間、現地スタッフとして活動した経験から、当時の現地の状況を映像を交えて報告。途上国現場では、国の違い、生活環境の違いなど、さまざまなジレンマ



がある中での支援の難しさがある。まず、支援者にとってわかりやすい支援の重要性。例えば募金はどこで何に使われているかということ。支援先がたくさんある中で、なぜユニセフなのかということの説明責任があるという。また、箱物(物資類)の支援は、支援者や現地政府関係者から期待されているものではあるが、必要とされている国への運搬方法、緊急性などを考えると、現地スタッフにとっては、それが最も大変で難しい運営であるため、緊急支援型援助と並行して、長期的視野に立ち、教員や警官の養成やトレーニング、エイズ予防や保健講習など、成果の見えにくい活動であるとしても、そういったソフト面の支援も大切であること。それには現地で生活する人の中から、本当に必要なことを現地の人の声として発せられるように、自助努力をサポートすることが大事であることを、ご自身の活動経験からお話いただいた。

兵庫県支部による交流タイム

フェアトレードのコーヒーをいただきながらの交流タイム。兵庫県支部・中村弘子さんのテンポのよい司会で、各支部から出された3択クイズやお



国言葉(各県の方言)でのユニセフ県民ショーは盛り上がり、会場は和やかな笑いの渦に。コーナーの終わりには1979年国際児童年の協賛歌「ビューティフル・ネーム」(ゴダイゴ)をみんなで合唱。参加したガールスカウトの小学生~70代まで、年代を超えたすばらしいハーモニーとなりました。

大阪支部による模擬授業

担当は安達洋さんと関本祐樹さん。現在、実際に学校で行っているユニセフ授業、60分間の「学習協力プログラム」から一部を紹介。VTR、展示物を用い、開発途上国の子どもたちの現実を伝え、ネパールの水が



めの重さを体験するワークショップも展開。ガールスカウトの小学生たちも水汲みの大変さを実感しました。また、大阪支部オリジナルのペープサートも披露。幼児たちに、「困ったときはどうしよう」と問かけると、いっせいに「ユニセフさん」とかわいい声が上がるとか。会場からは「早速やってみよう。参考にしたい」という声が聞かれました。

アフリカ大陸は、絶えない紛争問題や人道支援のあり方、はたまたビジネスの面においても世界のスタンダードが凝縮されている地域であるにもかかわらず、メディアでの取り扱いが極端に少なくしかも表面的で、その本当の姿が世界に、日本に伝わっていないと大津さんは危惧します。特に子どもたちの後ろ側にある現実をもっと多くの人に伝える必要があると強く感じています。

1年に平均3回はアフリカを訪れているという大津さんですが、この3月に帰国されたばかりの今回の旅は、いつもと違って不穏な空気の中で時には身の危険も感じたという大変な旅だったようで、たくましく日焼けした表情の中に、疲労の色もかいま見えました。

日本や国連が主催し、アフリカの元首・首脳級が横浜に集まった第4回のアフリカ開発会議から1年。日本はアフリカ支援の拡大を目指していますが、具体的な支援のかたちは大津さんの目に止まらなかった様です。

絶えない紛争とその原因

アフリカの国々で絶え間なく起こる紛争の原因は、植民地支配の歴史によるものと、もうひとつ、皮肉にもアフリカ大陸が石油や鉱物などの自然資源の宝庫だという事です。その資源を手に入れるために世界の各国が競って進出し、やがては紛争の火種がくすぶっても、アフリカにはそれをうまく解決する政治的基盤がないことがその問題を一層大きくし、現地の人達の生活を乱し、子どもたちの生存を脅かす結果となっています。また、こういった先進国による自然資源の発掘は、油田探索に使用され

る猛毒の放置など、大きな環境問題にもなっています。

見えない日本人の姿や支援

最近、特に大津さんの気持ちを重くしているのは、「アフリカに日本がない」という現実です。日本の民間企業は、カントリーリスクと表現される、「遠い」「危険」というイメージでアフリカ進出を敬遠する傾向にあります。また、ODAも支援活動をすすめてはいても、まずづくりという部分に力を入れていることもあって表面に見えて来ない。一方中国では同じようにリスクを感じてはいても、資金を投入し、進出をすすめて、たとえば、飲食店を開いて多くの現地人を雇い比較的高額な賃金を払う事で、「そこに多少の問題はあったとしても、すくなくとも雇用の促進には寄与している」と大津さんは考えます。

私たちにできること

それでは私たちは、アフリカのために何ができるのでしょうか？
まず、今回のような学習会に参加し学んで、そこで知ったことを他の誰かに伝えていく……。その繰り返しをこつこつと行う事で、一人でも多くの人達に理解を深めていくことが大切だと大津さんは語ります。そしてその知識を深め広げたら、具体的に自分のできることを考えてどんな小さな事でも良いので実行して欲しい。特に若い人には、島国・日本の中でとどまらず、広い世界に目を向ける機会を持って欲しいと、参加者に呼びかけました。



大津司郎写真展同時開催 4月21日~5月7日 コープこうべ生活文化センター 1階展示室

アフリカ紛争を語る 〜そこから見えてくるもの〜

講師 フリージャーナリスト 大津司郎さん

あちこちで繰り返す紛争と、はかり知れない貧困にあえぐアフリカの国々。そんなアフリカに思いを寄せてこれまで様々なかたちで関わってきたフリージャーナリストの大津司郎さんから、その現状と他の国々との関わり方の最新情報について語っていただきました。



大津司郎さん プロフィール

アフリカとのつきあいは、1970年、学生時代のアフリカ農業実習に始まる。これまで30年以上にわたり、タンザニア・ケニア・ウガンダ・ルワンダ・コンゴ・エチオピア・スーダン・チャド・ナイジェリア・南アフリカ・ジンバブエ・ナミビアなどを訪れ、野生世界と時事問題の両面からアフリカに関わり続けている。

「トライやるウィーク」 神戸市立御影中学校生が ユニセフに仲間入り

6月1日～5日

今年も県支部に「トライやるウィーク」の中学生がやってきました。今年は神戸市立御影中学校の長山広太郎さんと岡山純芽さん。学習チームが講師を担当する学習会に参加したり、ビデオでユニセフの活動について学んだ他、カード頒布や広報紙の発送作業など様々なボランティア活動も体験しました。

将来、国際機関で働きたいという長山くんからは「現地でユニセフ活動をすすめる人達を、地域でのこのような地道な活動が支えているのだとわかった」という嬉しい感想が、岡山さんからは「ユニセフの活動について深く考える機会をもてたことが嬉しい」とそれぞれ感想をいただきました。



たった1週間の出会いですが、「トライやるウィーク」を通じてこの世代の子どもたちが、世界の子どもたちに関心を抱き、自身の将来を考える機会になれば嬉しい事です。

募金をいただきました

ありがとうございます

5月6日(水)、毎年行われている「小原流盛花まつり」にて、ユニセフ募金をいただきました。4月12日(日)、芦屋中央公園を会場に「ユニセフカップ2009芦屋国際ファンラン」が開催されました。「教育をすべての子どもたちに」をテーマに行われ、参加ランナー、サンケイスポーツ、日本ハム株式会社のご協力により募金をいただきました。



西宮社会福祉協議会

善意の日のつどい

6月1日 西宮フレンテホール

県支部からは、学習チームの石本慎子さんが約200人の参加者に、ユニセフの歴史や活動の中で大切にしている「自立と予防」、世界の状況などを中心にお話しました。地域でボランティア活動に関わっておられるみなさんのつどいとあって、より多くの関心とご理解が寄せられたようです。また、ロビーでは「トライやるウィーク」に参加の中学生がユニセフ製品の頒布を行いました。



神戸市立住之江公民館

【あじさいセミナー】

「世界の子どもたちの状況について

～存在しない子どもたち～

6月28日 住之江公民館

ユニセフマークについてのゲームで楽しんだあと、ビデオ「この世界に生きる子どもたち」やスライド「カンボジアストリートチルドレン」を見てユニセフの取り組みを紹介しました。講師は学習チームの杉山三千さんとUNIES本田悠里さんと遠藤ちほさん・沢田絵里さんの3人。参加者の年齢層が幅広く難しい学習会でしたが、さまざまなプログラムを採用入れてみなさんに楽しんでいただけました。昔、ユニセフの支援を受けた経験を持つ参加者からの話もあり説得力のある会になりました。



兵庫県立大学生

「ユニセフについて

学び、考える」

7月10日

コープこうべ生活文化センター

兵庫県立大学の3年生・4年生の学生約14名を対象に、ユニセフの歴史・活動について、学習チームの塚本恵美子さんが講師としてお話をしました。班に分かれて「世界の不公平を少しでもなくすること」「自分にできることは...」などについてみんなで考えるなど参加型の学習会でしたが、学生たちはメモを取るなど熱心に2時間を過ごしました。



UNIES本田悠里さんからの報告

CFFフィリピンワークキャンプ

に参加しました!

6月のボランティア連絡会の中で、UNIESの本田悠里さんから、第60回CFFフィリピンワークキャンプの体験報告がありました。

3月14日から2週間の日程で、全国から集まった高校生・大学生27名が参加。現地のパイトゥ村に住む少数民族のイゴロ族の村人との交流や、電気・水道も無いところでのタンク建設にも加わり、村の人たちや参加者と知恵と力を出し合い水源確保の作業に取り組んだ様子。

サワリ(竹編み)やほうき作りで生計を立てている、素朴な村人との交流も心に残り「日本に帰りたくない」と仲間と話したという本田さん。充実した体験だったようです。

CFFはフィリピンで子どもの家を運営したり、ワークキャンプなどを実施しているNPO法人。

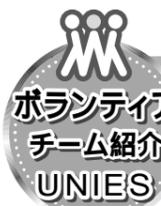
パネル展

「ユニセフってなあに?」を開催

6月27日～7月3日

コープこうべ生活文化センター

「救う」「支える」などキーワードごとに10枚のパネルを展示し、世界の子どもたちの現状やユニセフの取り組みについて紹介しました。開催期間中、多くの親子連れなどが訪れ、熱心に見入っていました。



新しい発想と 行動力がポイント!!

UNIES 本田悠里

私たちUNIES(ユニーズ)は、現在15名。メンバーは高校生から社会人まで...歳の差は気にせず(?)みんな仲良く和気あいあいとやっています!そもそも...このUNIESが生まれたのは、現メンバーの真淵早百合さんが学生時代に「私たち若者が、独自の方法で国際協力をしたい」と思い立ったのがきっかけでした。ちなみにUNIESという名前は「UNICEF Energetic Students」の略なんですよ。大阪支部ユニーズとのつながりもできて、この夏はますます活動の輪が広がりそう.....。発足時の「私たちができることを精一杯やろう!」という気持ちは、これからも持ち続けていきたいです。



今年は、賀川豊彦献身100年。前号に引き続き今回は、6月27日のユニ・ボラ塾で学習した講師の西義人さん(賀川豊彦献身100年記念神戸事務局顧問)のお話から紹介します。

2 賀川豊彦の生涯と基本思想

賀川は1888年、神戸で生まれ、4歳で父を5歳で母を失った。育った徳島でわが子のように慈しんでくれるアメリカ人宣教師に出会い、16歳で洗礼を受け、牧師になろうと明治学院に進学、路傍伝道を始めた。

21歳、肺結核の悪化する中、神戸のスラム街に住み、病人保護や無料葬式、子どもたちの遠足などの救貧活動を実践。26歳でアメリカ留学。ニューヨークで労働者のデモを見て、貧しい人々を救うのは援助ではなく自らの力で救うしかない、と、帰国後再びスラム街へ。労働運動、農民運動、生協運動、幼児教育、共済組合、医療組合などの救貧から防貧、自立への仕組みづくりに取り組んだ。ベストセラーの『死線を越えて』を

「児童買春・児童ポルノ 禁止法」改正を実現 させよう!



日本ユニセフ協会が1990年代から取り組んでいるアドボカシー活動のひとつに、児童ポルノの問題があります。昨年は、児童買春・児童ポルノ禁止法の再改正を目指し、「なくそう! 子どもポルノ」署名キャンペーンをスタート。みなさまにご協力いただいた11万5537筆の署名を、2009年2月に与野党幹部に提出、その後6月26日には、アグネス・チャン大使が衆議院法務委員会参考人として児童ポルノ被害者の声やユニセフの活動現場で出会った子どもたちの叫びを、直接議員の方々に訴えました。

しかし、衆議院の解散により廃案となってしまいました。解散に至るまでの経過では、一歩前進したともいえますが、次期国会では、「改正案を後退させることのない、一刻も早い改正法成立に向けての取り組み」が必要です。引き続き、「なくそう! 子どもポルノ」キャンペーンへのご支援をお願いします。



はじめ、300冊に及ぶ著書、海外講演、戦後日本の再生、世界平和などの活動は、シュバイツァー、ガンジーとともに三大聖人と称され、二度目のノーベル平和賞候補者に推薦されながら、72歳でその生涯を終えるまで続いた。

賀川の活動は多様だが、つねに社会的弱者のためのもので「愛は私の一切である。愛は人のためにすること」と、その根幹には基本思想の『愛』があった。それは賀川を「生協の父」とする生活協同組合にも引き継がれ、コープこうべでは「一人は万人のために、万人は一人のために」の愛と協同の思想として生き続けている。



神戸スラムでの正月



結婚当時の賀川とハル

募金や会員など、 あなたができる方法で ご協力ください

緊急募金のお願ひ

パキスタン人道支援緊急募金
郵便振替: 00190-5-31000
通信欄に「パキスタンK1-280兵庫」と記入

アフガニスタン緊急・復興支援募金
郵便振替: 00190-5-31000
通信欄に「アフガニスタンK1-280兵庫」と記入

ガザ人道支援緊急募金
郵便振替: 00190-5-31000
通信欄に「ガザK1-280兵庫」と記入

中国大地震緊急募金
郵便振替: 00190-5-31000
通信欄に「中国大地震 K1-280兵庫」と記入

ミャンマー・サイクロン緊急募金
郵便振替: 00190-5-31000
通信欄に「ミャンマーK1-280兵庫」と記入

アフリカ緊急募金
郵便振替: 00190-5-31000
通信欄に「アフリカ K1-280兵庫」と記入

自然災害緊急募金
郵便振替: 00190-5-31000
通信欄に「自然災害 K1-280兵庫」と記入

人道危機緊急募金
郵便振替: 00190-5-31000
通信欄に「人道危機 K1-280兵庫」と記入

送金手数料は免除されます。
口座名義: 財団法人日本ユニセフ協会
募金はゆうちょ銀行指定の振込用紙をご利用の上、上記口座までお振込みください。
ユニセフへの募金は寄付金控除の対象となります。

ユニセフ募金

～ご家庭で学校で職場で～

いただきました募金は、日本ユニセフ協会からユニセフ本部、そしてユニセフ現地事務所を通じて世界の子どもたちの支援活動に使われます。郵便振替をお願いします
口座番号: 00190-5-31000
加入者名: (財)日本ユニセフ協会
通信欄に「K1-280兵庫」とご記入ください。

会員って

ユニセフ協力活動を行う日本ユニセフ協会を、会費によって支援します。
一般会員...個人ならどなたでも
1口 5,000円
学生会員...18歳以上の学生
1口 2,000円
団体会員...団体、法人、企業
1口 100,000円
申込み方法についてはお問い合わせください。

ボランティア募集

世界の幼い子どもたちの命を守る活動や基礎教育を広める活動を、あなたも応援してみませんか? 兵庫県支部では、ユニセフの紹介・啓蒙活動や募金活動などを、交流を楽しみながら進めています。他にチームに分かれての活動もあります。興味のある方はぜひ事務局までお問い合わせください。

- **学習チーム** ユニセフについての出前学習会の講師活動
- **カードチーム** カードなどのユニセフ製品の頒布活動や管理
- **事務局チーム** 支部事務局をサポートする事務所内での活動
- **広報チーム** 「Wish」の作成やその他広報ツールの作成
- **UNIES** 学生など若者が中心の活動

学習会

イベント参加

カード頒布

事務局運営

広報



北部アルビル・東大阪市太平寺小6年がつくった自己紹介カードを手にした、国内避難民が通うジャワヘリ小6年生児童。写真・文は3箇所とも玉本さん提供。

2009年6月6日(土) コープこうべ生活文化センター第2会議室で、アジアプレス・玉本英子さんのイラク報告会が開催され、約35人が参加。今回のテーマは「イラクの子どもたちは今」。バグダッド、アルビル、ティクリートなどを取材された中で、特に子どもに焦点を当ててお話しいただいた。参加者の成田千尋さん(学生チーム・UNIES)から感想をもらった。

「イラクの子どもたちは今」

アジアプレス・玉本英子さんイラク報告会に参加して
UNIES 成田 千尋

繰り返される市民の犠牲

報告は衝撃的な場面から始まった。まずイラク戦争当初のバグダッド市内の様子が映し出される。砲撃される側から撮ったものだ。爆音が轟音に変わり、市内に火の手が上がる。続いて空爆で二児を失い、重傷を負ったもう一人の子どもを必死に救おうとする父親の映像。痛ましくて見ていられなかった。結局その子は治療を受けられずに亡くなってしまった。今、私が調べているベトナム戦争と、イラク戦争がダブって見えた。いつでも空爆で犠牲になるのは一般市民。何故このようなことが何度も繰り返されるのか。戦争が終わっても、肉親や友人を失った人たちの苦しみが続くことを、忘れてはならない。

「うん、違うよ、ムスリムだよ...」

その後は様々な地域の子どもたちの映像を、説明しながら見せて下さった。いくつか印象に残った場面をご紹介しよう。まず、玉本さんがバグダッドの文房具店で出会った少年のお話。「あなたはスンニ派? シーア派?」と尋ねると、「うん、違うよ、ムスリムだよ」という答えが返ってきた。大人の世界では宗派に分かれて争っているけれど、子どもの世界ではイスラム教徒ということ一つだと思っているのかと感心したと店の主人に話すと、「そんな甘いものじゃない」と怒られたそうだ。もしその子の宗派が違う派の人に知られると、殺される恐れがあるので、自分の身を守るために言ったことだと。

子どもでもそんなことを考えなければならぬのか、と、現実の厳しさに唖然とする思いだった。

また、モスル生まれでアルビルに国内避難している少年は、「自分の故郷に帰りたいの?」と聞かれて、「帰りたくない。戦争があるから」と答えていた。心なしか寂しそうだった。彼は引越すとき、仲のいい友達に別れを告げることもできなかったという。そのような状況は、イラクの各地で見られるらしい。アルビルに来て一番よかったのは、外でサッカーができるようになったこととも話していたけれど、それは日本ならば当たり前なことだ。

少しイラクの生活について触れておけば、イラクはイスラム国家の中でもかなりリベラルな方で、空爆前、人々は電気も水もある、普通の暮らしをし

ていたという。映像で見せていただいた典型的なイラク人の家庭も、電化製品も車もある立派なものだった。その暮らしをいきなり破壊されたのだから、子どもたちの大人に対する不信感は根強いとのこと。本当に何のための戦争だったのだろうか。

自己紹介カードが結んだ 太平寺小学校と、 ジャワヘリ小学校との交流

その中でひとつ、心温まるお話があった。東大阪市の太平寺小学校と、イラクのジャワヘリ小学校の子どもたちの交流だ。ジャワヘリ小学校は、イラク各地の戦禍を逃れてきた国内避難民の子どもたちが、宗派や民族に関係なく勉強している学校である。そこへ玉本さんが持っていったのは、太平寺小学校の子どもたちが作った学校生活や修学旅行で行った広島の写真ボードと、写真付きの自己紹介カード。遠く離れ



北部アルビル：国内避難民が通うジャワヘリ小6年生に、東大阪市太平寺小6年生が製作した原爆を伝える写真ボードを説明する玉本さん。

た国で自分たちのことを考えていてくれる子どもがいると、イラクの子どもたちはとても喜んだという。また、広島原爆の写真は、日本でも同じよう

なことがあったのだという共感を生んだ。国際電話で東大阪とアルビルをつなぐという試みでは、あるイラクの少女が「兄弟だと思っています。いつか日本に会いに行きたい」と呼びかける場面があって、とても印象的だった。遠く離れていても、誰かのことを考えることはできる。それをもっと形にできれば...と考えさせられた。

しかし、ティクリートにある孤児院の子どもたちの映像はショックだった。爆撃でそばにいた父親を失い、話せなくなってしまった少女、腕の下を爆弾でもぎ取られた少年...。玉本さんが話しかけても抱き上げて、なんの反応も見せなかったという。どれだけの傷を心に負ってしまったのだろう。見ていて悲しかった。フセイン政権が崩壊して6年経つけれど、彼らの苦しみはまだ癒えない。今、どうしているのだろう。戦争が終わっても、その傷跡はいつまでも残るということは、よく考えなければならぬと思う。

今年、アメリカの戦闘部隊はイラクから撤退することが決まったという。アメリカ側はやっと帰れると喜ぶ意見が大半だろうが、イラクの人々の感情は複雑だ。「米軍は私の家族を殺した憎い敵だが、その敵に頼らざるを得ない。この苦しみを分かっしてほしい」



バグダッド市民が憩う、ザウラ公園は家族連れでごったがえしていた。バグダッドの治安はわずかに改善されてきた。

その気持ちを私たちは分けることができるだろうか。分からない。でも、考え、想像しなければならぬと思う。アメリカ軍が撤退すれば、イラクへの関心はさらに低下するだろう。世界で起きている出来事に目が向けられないのは、視聴率を指標とするマスメディアの報道にも問題があるけれど、逆に視聴者の傾向を如実に映し出しているともいえる。多くの人が関心を向ければ好転させられる問題は、もっとたくさんあるのではないだろうか。今どこもかしこも不況で、先行きが見えない状況であるけれど、日本はまだ豊かである。そんな状況だからこそ、外にも目を向ける必要があるのではないだろうか。すでに一国だけ良ければいいという時代ではないのだから。日本にいると分からないことはたくさんある。マスメディアの報道が全てだと思わず、報道されない部分はどんなにかまで考えていく必要がある、それを認識させられた報告会だった。

戦争とは...? 報道とは...? イラクから届いた 子どもたちのメッセージ。

感想抜粋

焼けこげた車の中でニコニコしている子ども。戦火の中でも文房具を買いに来る子ども。2日に1回、学校に行けるかどうかの子ども。日本の子どもたちと交流する子ども。そして最後の孤児院の子ども。それぞれの表情に現実の厳しさ、子どもたちのたくましさ、やるせなさ...。いろ

いと感じました。映像のちからはすごいですね。またぜひ伺いたいです。(女性) 孤児院での子どもの姿はとてもショックでした。私も震災のとき、字が書けませんでした。私の経験は天災だが、彼らは罪もなく家族もないので、とてもつらいだろうと思いました。私もイラクに生まれていたらと思うと、ひとごとではない。(女性)

玉本英子さん プロフィール



1966年、東京都生まれ。豊能町在住。アジアプレスに所属のビデオジャーナリスト。デザイン事務所を退職後、94年からアフガニスタン、コンゴなど紛争地域を中心に取材。01年以来、イラク取材は9回を数える。